16th 新響

新交響楽協会 新交響楽団

第16回定期演奏会



THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA

16th Subscription Concert

指　揮　芥川也寸志
Conductor　YASUSI AKUTAGAWA

独　奏　徳永二男
Violin Solo　TSUGIO TOKUNAGA

楽新協交会響

新交響楽団第16回定期演奏会

I 「大学祝典序曲」作品80 ……ヨハネス・ブラームス
Academic Festival Overture op. 80 ……Johannes Brahms
(1833～1897)

II ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 …… フェリックス・メンデルスゾーン
Violin Concerto Eminor op. 64 …… Felix Mendelssohn

1 アレグロ モルト アパショナート
Allegro molto apassionate

2 アンダンテ
Andante

3 アレグレット ノン トロッポ――アレグロ モルト ヴィバーチェ
Allegretto non troppo――Allegro molto vivace

III 幻想交響曲 作品14 …… エクトル・ベルリオーズ
Symphonie fantastique op. 14 ……Hector Berlioz

1 夢 情熱
Rêveries Passions

2 舞踏会
Un bal

3 田舎の風景
Scene aux champs

4 断頭台への行進
Marche au supplice

5 悪魔の祝日の夜の夢
Songe d'une nuit du Sabbat

厚生年金会館大ホール　1968年4月8日(月) 7時

挑　戦

芥川也寸志

グルノーブルの冬季オリンピックでは，新しい世界記録がぞくぞく生れたが，日本選手団は不振を極め，そのあまりのふがいなさに，わざわざ国費を使って国の恥をかきに行くとは何事か，というような意見も出て，今年のメキシコにも尾をひきそうな気配である。

記録への挑戦，これがスポーツの魅力の本源であり，その戦いに強い者は大きな人気と尊敬とを得ることが出来る。強い人間が記録への斗争を挑む姿は，それを目撃する人間にも勇気とはげましを与えるからだ。

ぼくはよくアマチュア音楽について考えるとき，スポーツの世界を想い起す。ハード・トレーニングによって自己を鍛えなければ，よい成績をおさめ得ないという点では，音楽もスポーツも同じことである。栄光は，常に苦難の末にあるものだ。

それにもかかわらず，いつもアマチュア音楽が甘っちょろい線を低迷し，道楽者扱いされ，おのれ自身にもきびしくなれないのは，スポーツにおける記録，つまり勝負がないからではないか。負ければ誰だってくやしいし勝負ある限り勝たねばならぬと思う気持は自然に湧いてこよう。相手に勝つためには，まずおのれに勝たねばならぬし，そこに自然と苦難に耐え，おのれを鍛え抜く心がまえが生れてくる。

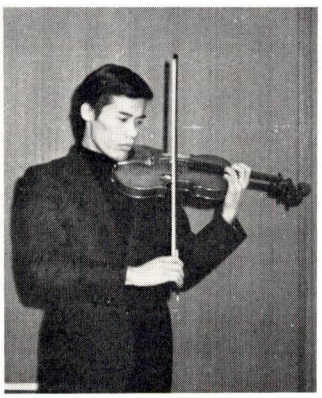
ところが音楽ではそうはいかない。新響の諸君にしたって，自分自身に甘ったれている。アマチュア精神の発揮などと，口先だけでいくら叫んでみたところで，これでは話にもなるまい。

新響が，プロのオケにはないアマチュアらしい素晴らしい響――文字通り新しい響をうち鳴らすためには，もっときびしい心がまえと技術に対する練習がどうしても必要だと思う。たとえ，時計の文字盤に刻み込まれるような記録はなくても，団員一人一人の心の中には，おのれ自身に対する記録への挑戦という精神がなければ，本当のアマチュアリズムは生れないだろう。

しかしこれとて，指揮者が如何に口先で精神興揚を叫んでみたところで，一国の総理が国会で愛国心や国防意識の興揚を叫ぶのに似て，ただ空しい響を残すのみであろう。それは，おのずからみんなの中に湧きあがってくる性質のものであり，いろいろな形の愛国心があるように，いろいろな形の記録と，それへの挑戦があり，それらが自由に，個性的に，しかもお互いに刺激しあって発揮されていくような条件が必須のものであろう。

難しいことだが，もしこの条件が満たされたとき，新響はおそるべき偉力を発揮すること，まずうけあいである。ぼくはその日の一日も早からんことを希う。今，取組んでいる曲が＜幻想＞ではあっても，これが幻想に終るようでは新響もおしまいである。アマチュアの音楽には，独特の迫力と，独特の魅力のあることを，断じて忘れないでいてほしいと思う。（新交響楽団常任指揮者）

独奏者の紹介



▷今夜の独奏者，徳永二男氏を東響練習所にお訪ねし，いろいろ話を伺ってみました。

問　月並ですが，お生まれは？

答　昭和21年11月20日，神奈川県の横須賀です。いまは，豊島区椎名町におります。

問　ヴァイオリンの方の経歴を。

答　5才のときから鷲見三郎先生につきました。昭和33年，毎日音楽学生コンクール小学校の部で全国第一位を授賞いたしました。昭和37年，桐朋学園特別高等科へ入学。また，40年にはＮＨＫ，毎日音楽コンクールに入賞しております。現在は，東京交響楽団のコンサートマスターです。

問　以前，東響・新響と合同演奏をやりましたが，新響の感想を。

答　特に欠点はないようです。明瞭な音を出しますし，いいオーケストラですよ。ただ，伴奏部分が少しうるさい。もっと他のパートを大切にしてほしいと思います。

問　〝指揮者〟芥川氏について。

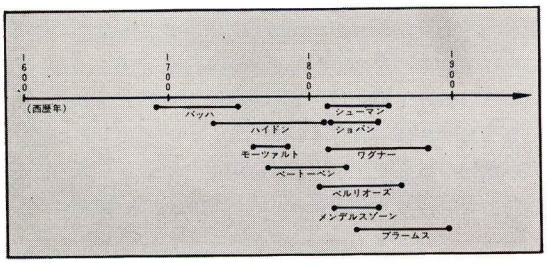
答　大変すてきです。ただ練習に熱心すぎて，本番で少し疲れが見えるようですね。

―― どうも有難うございました ――

曲目解説

皆さん，こんばんは。新交響楽団の第16回定期演奏会によくいらっしゃいました。私たちのオーケストラは一昨年，ベートーベンの九つの交響曲の連続演奏会を行ない，その後は，ベートーベンからあとの時代，いわゆるロマン派と呼ばれる作曲家たちの作品へ主に取り組んできました。昨年はブラームスの交響曲第２番，第４番に続いて，今回はロマン派の作品の中でも最もその香りの高いものと思われるブラームス，メンデルスゾーン，ベルリオーズのそれぞれ代表的な作品を演奏いたします。

きょう一日の仕事を終えて客席でホッとなさっている方，夕食もそこそこに駆け付けられた方，いろいろだと思いますが，演奏する私たちの方も同じことで，ほんの１時間も前まではオフィスや工場にいたわけで，この短かい時間内での〝音楽家〟への気分転換はなかなか難かしいものです。曲目解説といっても今回は，いつもはオーケストラの土台として目立たない位置にあるコントラバス奏きが書いたもので，快説（怪説？）といった方がいいかもしれません。まず参考のために，こんや演奏する３人の作曲家が，時代的にどのあたりにいたかを図で示しておきます。



ブラームス：大学祝典序曲　　作品 80

ブラームスの管弦楽曲としては四つの交響曲，ハイドンの主題による変奏曲，大学祝典序曲，悲劇的序曲，ハンガリア舞曲などがあげられます。この「大学祝典序曲」は，「第２交響曲」と「第３交響曲」のあいだ，1880年ごろ，ブラームスがブレスラウ大学から博士の称号を贈られたのに対する謝意として作曲され，1881年ブレスラウの学位授与式においてブラームス自身の指揮で初演されました。このとき，「悲劇的序曲」，「第２交響曲」も同時に演奏されたのですが，拍手は熱狂的だったといわれております。

ヨーロッパの，それも一昔前の大学は，日本の現在の大学にくらべて相当にアカデミックであったと想像されます。ところで，この「大学祝典序曲」はこの風潮とは逆に，学生歌を四つ織り込んだものとし，作曲者自身，〝学生の歌を使ったスッペ風の陽気な接続曲だ〟といっております。とはいっても，底抜けに明かるい感じともいえず，ブラームス特有の音を重ねた，なんともいえない重厚さがみられ，やはりガッチリしたレンガ造りに苔むしたドイツの大学の古めかしさが感じられます。

曲は前にも述べたように，四つのドイツ学生歌からできています。つまり，

① 〝われらはりっぱな校舎を建てた〟（ハ長調）。63小節目にトランペットで吹かれる堂々とした旋律。
② 〝国の親父〟（ホ長調）。128小節目にヴァイオリンで奏されます。
③ 〝わんぱく新入生〟（ト長調）。ファゴットによって現われますが，この部分を聞くと受験時代を想い起される方もあるでしょう。
④ 〝喜びの歌〟。この曲の終わりを飾るにふさわしく，華やかに，そして堂々とした感じとなっています。

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ホ短調　　作品 64

やこぶるうどうぃっひふぇりっくすめんでるすぞおんばるとるでぃ――，これはメンデルスゾーンの名前の全貌です。なんとも長い名前ではありませんか。

このメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲は，交響曲第３番「スコットランド」，第４番「イタリヤ」，「真夏の夜の夢」などの序曲，室内楽などとともに，彼の代表的な作品の一つですが，曲そのものについて細かく文字で表わすのはここではさしひかえましょう。それほどに有名で，美しい曲なのですから。

ところで，協奏曲の練習はオーケストラにとってつまらないものです。ところがしばらくたつと，驚くべきことが起こるのです。それは，一人の人物が現われて，いままで抜けていた箇所をことごとくうめてくれる事態が生じるわけで，そのときのすばらしさといったら今までがつまらなかっただけに，また格別です。もちろんその人物は独奏者のことです。筆者がもっと若く，大学のオーケストラで奏いていたときに最初に経験したヴァイオリン協奏曲がやはりこの曲でした。演奏会とちがって，ほんの近くで聞く独奏のすばらしさに対する感動はいまも記憶に新らしいものがあります。オーケストラ奏者にとって協奏曲をやるということは，やはり音楽的感動を得る，またとないチャンスの一つだといえましょう。

〔伊賀健一（D.B）〕

ベルリオーズ：幻想交響曲　　作品 14

このプログラム原稿の締切日になって，どなたも都合がわるくなり，ついに私にお鉢がまわってきました。もともと私は名曲解説の資格もなし，そんな類の本も余り読んだことはありません。ただ，スコア（総譜）の前にある解説をパラパラッと見るのが関の山なのです。それで，大いに困却したのですが，会社でチケットを売るため，社内報へこの曲の内容を走り書きし，回覧させてあったことに気付きました。これこそ，まさに干天の慈雨というわけで，それを，以下にはりつけることにいたします。
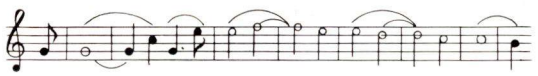
この「幻想交響曲」は一種の標題音楽です。譜面で題の横には「ある芸術家の生涯における一つの挿話」と記入してあります。

彼は，27才のとき，ヘンリエット・スミスソンという女優と恋愛におちいりました。結局，これは失敗したのですが，ベルリオーズは大変な激情家で，非常な焦慮に陥り，何度も自殺しようとしたほどです。この曲の楽譜の最初には，次のようにしたためられています。

恋に狂い，人の世の移り変りに飽きた若いひとりの芸術家がアヘンを飲む。しかし，その量が少なかったため死に至らず，ただ深い昏酔状態にはいる。その状態で一連の夢を追う。

その夢の中で，官能と感情と幻想はすべて音楽的な幻影となってつきまとう。彼は，恋する女性の影像をあらゆる場所で，つねに一つのメロディとして心の中に描くようになる。

幻想交響曲は，次のように５つの楽章からなりたっていますが，女性の幻影は，五つの楽章で各所に出てきます。ベルリオーズは，それを「固定観念」（下図のメロディ）と名づけています。



各楽章には，次のような題がつけられています。聴く人はどう想像しようと勝手なのですが，それらしい感じがつかめればよいでしょう。

1. 夢，情熱……芸術家が女性にあう以前の心の不安，憂愁，対象のない歓喜，そして彼女の出現によって与えられた熱愛の情。
2. 舞踏会（ワルツ）……舞踏会の華かな情景や，ざわめきの中に，彼女の姿を再び見出す。
3. 田舎の風景……芸術家は，２人の羊飼いが野辺で笛を吹きくらべているのをきく。静かなたたずまい。微風のそよぎ。そこへ彼女が姿を現わす。もし彼女が自分を裏切ったら？ 不安がよぎる。日没，遠くで雷の音。孤独。寂寞。
4. 断頭台への行進……彼は思う。自分は彼女を殺し，断頭刑の判決を受ける。刑場への行進が続く。また彼女の影像が横切る。また行進。そして死の直前，一瞬間また彼女の影像……。絶命。
5. 悪魔の祝日の夜の夢……若い芸術家は，自分の葬式にあやしい妖怪や魔物たちとともに，魔女の踊りを見ているのだと思う。あやしい叫び声。かん高い笑い声のこだま。死者を葬う鐘の音。地獄の乱舞が頂点に達し，曲は終る。

こう説明しただけで異常な感じを受けられると思いますが，作曲したベルリオーズという人も多少天才的で異常さを秘めていたようです。曲が完成したのは，1830年でいまから160年ほどまえでした。ベートーベンが死んだのは，その３年前ですが，ベルリオーズの作品はベートーベンとは全然異なっています。ベートーベンはいわゆる古典主義的な作曲家で，骨組みの太いガッシリした作品が主となっています。ベルリオーズの行き方は，ロマン主義の道をたどり，形式にとらわれず自分の主観を端的に打ち出しています。楽器の使い方も管楽器をふんだんに使い，色彩感が充満しております。

音楽の演奏者は，曲を理解し作曲者の気持になり切らなければならないといわれています。ベルリオーズは前にも書いたように多少，異常性格者だったそうです。芥川先生は，練習中よく「狂人の曲だからそのつもりでやれ」とハッパをかけました。ですから，今晩の新響団員約100名は，サイケデリックな狂人になります。ただしステージを降りれば常人です。ご安心ください。

〔松 永　昇（Fl）〕

連　載（戦後日本オーケストラ小史）Ⅳ

馬　場　　健

■　外国オーケストラの来日

前回，私は，昭和25年秋のラザール・レヴィを皮切りに，続々と来日した外国の演奏家たち，とくに指揮者と日本のオーケストラに客演したソリストたちに触れ，その影響について書いた。とくにカラヤンをはじめとする大指揮者たちの客演，クルト・ウェスなど外国人指揮者の常任が，日本のオーケストラ界に与えた刺激は，図り知れない。そして，日本のオーケストラの質の向上は，多くの聴衆の耳にも明らかであった。けれども，多くの聴衆は，その日本のオーケストラが，世界の水準でいえば，一体どのくらいのところに位置しているかに，大きな関心を寄せていたに違いない。外国から来た指揮者たちの，多分に外交辞令を含んだ讃辞や，時には痛烈な批判も，自分の耳で確認することのできない聴衆には，それほどの説得力をもたなかった。その意味で，昭和35年5月に来日した〈シンフォニー・オブ・ジ・エア〉のもつ意義は，きわめて大きい。日本のオーケストラ史のすぐれた研究者，中村洪介氏は，この出来事を，戦後のオーケストラ史の最も大きな転機のひとつと考えておられる（《NHK交響楽団40年史》所載《NHK交響楽団その40年の歩み》p.78ｆ）。私自身の時期区分は，それとは多少違うが，その意義については，全く同感である。それまでにも，大正14年の《日露交歓交響管弦楽演奏会》や昭和14年のハルビン交響楽団など，外国のオーケストラとの接触は，必ずしも皆無ではなかったが，欧米第1のオーケストラの来日は，これが初めてであった。ながらく巨匠アルトゥーロ・トスカニーニの下にあったNBC交響楽団が，トスカニーニの死後，改称したこのオーケストラは，われわれにとっては，レコードでなじみの深いアメリカ有数の楽団であった。同行した指揮者はウォルター・ヘンドルとソア・ジョンソン。彼らは，数回にわたる演奏会のほかに，5月23日には，後楽園球場でNHK交響楽団との合同演奏を行なった。彼らの演奏は必ずしも全面的に好評だったわけではなく，一部には，あまりにアメリカ的で，非情であるという声も聞かれたが，そのすさまじい音量，輝かしい音色，すぐれた楽器の性能，個々の奏者のすぐれた技倆など，やはり日本のオーケストラにはないものを示した。

ついで翌昭和31年には，高名な作曲家パウル・ヒンデミットを指揮者として，40名ちょっとの小編成で，ウィーン・フィルが来日した。編成の関係もあって，曲目も限られたが，やはりシンフォニー・オブ・ジ・エアとは全く違った雰囲気を示した。私の耳には，非常にゆっくりと，柔和な表情で演奏されたモーツァルトの《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》が残っている。同じ年の6月には，アルフレッド・ウォーレンスタインに率いられたロスアンゼルス・フィル，さらに昭和32年11月には待望のカラヤンとベルリン・フィルが，フル・メンバーでやって来た。入場券を手に入れるには，徹夜の行列が必要だった。私にとっては，高熱をおして聴きに行った初日のワグナーの《トリスタンとイゾルデ前奏曲と愛の死》やブラームスの第2交響曲は，私のささやかな音楽体験のなかでも，最も重要なもののひとつとなった。

それ以後，来日したオーケストラと指揮者を一応列挙しておくと，昭和33年4月，ガウク，ザンデルリンク，ヤンソンスを指揮者とし，チェロのロストロポーヴィチを帯同したレニングラード・フィル，昭和34年10月にはカラヤン，ウィーン・フィルとアンチェル指揮のチェコ・フィルがほとんど同じ頃に来日，昭和35年5月には，ミュンシュとボストン交響楽団，その年の12月にはジュリーニとイスラエル・フィル，昭和36年には，東京世界音楽祭に，副指揮者，小沢征爾を含むバーンステインとニューヨーク・フィル，大阪国際フェスティバルにコンヴィチュニー指揮のライプツィッヒ・ゲバントハウス管弦楽団が，やはり同時に来日した。昭和37年4月には，アムステルダム・コンセルトヘボウ（ヨッフム，ハイティンク），昭和38年2月，ポーランド国立大交響楽団（クレンツ，カトレヴィチ），同年4月，ロンドン交響楽団（モントゥー，ドラティ，ショルティ），同じく10月，ベルリン・ドイツ・オペラに同行したそのオーケストラ（ベーム，ホルライザー，マーゼル），昭和39年4月には，大阪国際フェスティバルに，ソヴィエト国立交響楽団（イワーノフ，ヤンソンス），パリ音楽院管弦楽団（クリュイタンス），ケルン古典管弦楽団（ライトナー，クルットゲ）の三つがぶつかった。昭和39年10月には，2度目のロンドン交響楽団（ブリス，デーヴィス，ケルテス），昭和40年3月には，珍しい韓国のソウル市立交響楽団（金萬福），同年4月，バイエルン放送交響楽団（クーベリック），同年9月，シドニー交響楽団（ホプキン

ス），昭和41年４月，やはり２度目のベルリン・フィル（カラヤン），同年10月には，フランス国立放送管弦楽団（ミュンシュ，ル・ルー，セバスチァン）とワルシャワ・フィル（ロヴィツキ），ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団（ヨッフム，マゼール）の三つが，ほとんど同じ頃に公演をもった。昭和42年４月には，モスクワ・フィル（コンドラシン，D．オイストラフ），５月にフィラデルフィア管弦楽団（オーマンディ），11月にウィーン交響楽団（サワリッシュ）と続く。今年，昭和43年春のシーズンには，なんと五つのオーケストラが相次いで来日することになっていたが，そのうち３度目のロンドン交響楽団の来日が中止となったので，４月に，サンフランシスコ交響楽団（クリップス），５月に，バンベルク交響楽団（カイルベルト，岩城宏之），６月に，２度目のソヴィエト国立交響楽団（スベトラノフ，M．ショスタコーヴィチ），７月に，スイス・ロマンド管弦楽団(アンセルメ，クレツキ）の四つが集中する。

昭和30年のシンフォニー・オブ・ジ・エア以来，今春の四つも含めると，ほぼ14年間に，われわれは，なんと少なくとも，54人の指揮者による33の外国のオーケストラを聴いてきたことになる。もうわれわれの聴いていない世界有数のオーケストラは，数えるほどしかない，といえるだろう。これには功罪両面があるかもしれない。個々のオーケストラが，われわれに何を遺して行ったかを検討する余裕はないが，彼らの演奏の多くは，日本のオーケストラばかりではなく，広く日本の音楽界全体に強い刺激を与えてきたことは確かである。それは単にすぐれた演奏によって，われわれ日本の聴衆の耳を肥えさせたばかりでなく，われわれ自身のオーケストラの発展を考え，批判や反省の材料を与えてくれたといえよう。たしかに，最近の外国オーケストラの来日ラッシュは，反面，日本のオーケストラの経営を圧迫しはじめているが，それはまた別の問題であり，改めて論ずることにしよう。

私は，今回のこの欄を，日本のオーケストラの直接の活動から，少しそらして，書いてみた。ことのついでにもうひとつ，やはり日本のオーケストラと直接の関連はないが，日本のオーケストラ活動にも少なからぬ影響を与えた事柄に触れておきたい。

戦時中から，戦争直後にかけて，日本の音楽家たちの懸命の努力にもかかわらず，日本の音楽は，いわば枯渇状態にあったともいえる。少なくとも，世界の音楽界の新しい動向については，ほとんどつんぼさじきに置かれていたといってよい。たとえば，シェーンベルクのあの12音技法にしても，それが本格的に日本の作曲界に直接の影響をもたらしたのは，戦後のことである。まして，当時のヨーロッパやアメリカの新しい音楽，新しい演奏に触れる機会は，ほとんどなかった。そのようななかで欧米の，とくにアメリカにおける音楽活動の一端を，僅かながらも，垣間みる窓が開かれた。それは，在日米国占領軍によって開設された，いわゆる〈進駐軍放送〉，東京では，ＷＶＴＲというコール・サインで知られた進駐軍向け放送であった。多くのジャズやダンス音楽，コメディーなどにまじって，トスカニーニ＝ＮＢＣ，モントゥー＝サンフランシスコ，ロジンスキーやミトロプーロスとニューヨーク・フィル，カンテルリとＮＢＣ，ウォーレンスタインとロスアンゼルス・フィル，クーセヴィツキーとボストン，ソリストでは，ハイフェッツ，ルービンスタイン，ピアティゴルスキー，カペルなどといった人たちの演奏（なかには演奏会での実況中継録音も多かった）が放送された。多くは，ポピュラーな名曲であったが，その中に，時には，おやと思うものもまじっていた。バルトークの《管弦楽のための協奏曲》，フランク・マルタンの《サンフォニー・コンセルタント》《７つの管・弦・打楽器の協奏曲》ショスタコーヴィッチのいくつかの交響曲，コープランド，ロイ・ハリス，バーなどアメリカの作曲家たちの作品に触れたのも，確かその〈進駐軍放送〉が最初だった。

その後のＬＰレコードの発達，さらにはステレオの発展，その他のマス・メディアによって，今日，われわれは，ほとんど好きな時に好きな音楽を好きな演奏で聴くことができるようになったが，第２次大戦直後からの５年か６年というものは，そのような僅かな機会をとらえて，むさぼるようにして音楽を聴いてきた人は多い。そしてそれも，今日の音楽の繁栄と無関係ではないだろう。

（音楽評論家）

鼎　談

5年ぶりの新響

――技術と雰囲気はどう変ったか――

今回は，新響の古いメンバーであり，かつ，アメリカへ長期出張して向うでの音楽生活を体験された2名の方との鼎談を試みました。ひとりは，トランペットの家合幹夫さん。新響創立当時からのメンバーですが，社命で昭和38年から日本航空サンフランシスコ支社へ転勤。昨年の暮れ帰国し，再入団されています。

もうひとりは，もとコンサートマスターの高倉寿さん。資生堂の外国課長さんですが，こちらは昭和37年から約4カ年，ロスアンゼルスに駐在しておられました。いずれまた新響へ！と張り切っています。

このご両人から，アメリカにおけるアマチュア・オーケストラの活動ぶりや以前，在団していたときと帰国後の新響の変化などを，いろいろ伺ってみました。

＝出席者＝

◇ 家合幹夫氏
（現団員，トランペット，日航勤務）
◇ 高倉　寿氏
（元団員，ヴァイオリン，資生堂勤務）
－司会：松永－

≫古き良き時代？

司会　おふたりとも新響にはいったのは，相当以前だと思うんだが，そこらへんから。

家合　「労音アンサンブル」が「新響へ切り替る際の第1回総会を覚えている。昭和31年の夏ごろかな。

司会　私がその年，暑いころに入団したと思うから，それ以前だよ。

家合　じゃ春ごろでしょう。もう時効になりそうな話だけど…。

高倉　僕は，ベートーベンの第1交響曲を練習しているとき，はいったのを覚えているね。

司会　それじゃ，家合さんより少しあとになる。33年ごろでしょう。



▽
高倉氏
△

高倉　はいったときの動機がふるっているんだ。創立時コンマスをやっていた日本水産の大内さんという人が，楽器を持って会社へ来いというんだよ。日本水産へ推参したわけ（笑）。そしたら，Vl, Vla, VCがひとりずつ控えていて，いきなりハイドンのクワルテットをやろうというんだ。あとで考えるとテストだったんだね。まあ，どうにかおメガネにかなったらしくて，入れてもらえたけど，最初すわった席のとなりに，高木さんの奥さんがいたことを今でも覚えてるよ。

司会　34～35年ごろ，会津若松とか，上田，熊谷などへ演奏旅行に行ったね。

家合　上田は，ちょうど1月末の寒い最中。公民館に暖房がなくてステージには，あちこちに火鉢がおいてあったね。火鉢に近い人はやけに熱いし，少し離れればブルブル…。

司会　僕なんか，コントラバスとピッコロの持ち替えでアワを食ったこと，今でも思い出すよ。ところで演奏会が終ったら，いつの間にか，みんな姿が見えなくなっていた。

家合　ちょうど，シーズンだったせいでスキー組，スケート組，それに温泉組と三つにわかれたようだ。

司会　こちらは，どうしても温泉の方だな。

≫シスコのアマ・オケ

司会　ところで，そうこうしているうちに，ふたりともアメリカへ行ってしまったんだが，向うのオーケストラの話などしてくれないか。

家合　サンフランシスコには，新響のような純粋のアマ・オケはないんだ。僕がちょっと顔を出したのはコンサーバトリー・オブ・ミュージックという学校の中にあるもので，メンバーはそこの学生が中心になっている。この学校の卒業生は，ほとんど音楽の先生になるらしいんだが個人のテクニックは割りといい。特に感心したのは金管楽器で，ホルンが群を抜いているようだ。しかし，オーケストラとして考えると，新響の方がずっとうまいと思うな。

司会　その他には……。

家合　これは日本へも来たそうだけど，サンフランシスコ・ユース・シンフォニーというのが，シスコから車で1時間ほどかかるサン・ホセというところに本拠をおいている。あとは，大学，高校，中学といったところにオーケストラ，ブラスバンドがたくさんあるらしいが，くわしいことは調べ切れなかった。とにかく，団体の多いことは日本の比ではないようだ。ちょうど野球のようにマイナリーグ→メージャリーグといったぐあいで，音楽人口の層はベラボウに厚いんだな。

≫ロスの日系交響楽団

司会　ロスアンゼルスの方は，どうだった？

高倉　カウンティ・オーケストラというのが，いくつもある。新響と同じく，普段は職業を持っている人たちなんだが，フラッと集まって演奏会をやる。メンバーは学校の先生なんかが多いらしい。いずれもテク

ニックは，相当なもんだ。面白いことには，それらの一つにロスアンゼルス日系交響楽団というのがあって全員，日系アメリカ人で編成されている。指揮しているのは，芸大を出たチェリストで菊川さんという人。コンマスは遠藤さんという人で，ベラボウにうまかった。ただ，この人は音楽家ユニオンにはいったので，このオケに出られなくなってしまった。ユニオンの力は非常に強い。僕は1回だけここの演奏会に顔を出した。ちょうど，そのころ，芥川先生がアメリカ旅行中で，このオーケストラを聴いていったが「新響の方がもっとうまいぞ」なんていって帰っていった。

司会　メンバーや編成なんかは？

高倉　標準の2管編成。メンバーは，むろん日系アメリカ人だけで，総数は40人ばかり。しかし，チャイコのシンフォニーなんか堂々たるもんだった。がいして向うの人は社交に室内楽などを取り入れている感じがする。あるとき，アマチュア室内楽の集いに出ないか，と誘われたんだ。どうせ大したことないだろうと安請け合いして，「じゃスプリングソナタでも」と返事したんだ。ところが当日になると，みんなプロ級でうまいんだね。それこそバリバリ弾く。おまけに日本人は僕ひとりだ。ガリ版刷りのプログラムを見るまで知らなかったが，すっかり恥をかいてしまったというわけ。

≫多い音楽人口

家合　さっきも言ったけど，音楽人口の量と質は日本の比じゃないようだね。音楽大学を卒業して一流オーケストラにはいる人なんてまずいないようだ。一流オーケストラにはいる技術を持ったオーボエ奏者がトラックの運転手をやっていてチャンスをねらってるという話を聞いた。プロのオケとしては，サンフランシスコ交響楽団があったが，野球リーグでいえば，3A級というところだろう。また，近くにオークランド交響楽団というのがあったが，これなど2A級といったところかな。

司会　日本の演奏団体もだいぶ訪米したようだったが，評判はどうだったかね。

家合　僕は，N響，日本フィル，それに桐朋学園弦楽合奏団と三つ聴くチャンスがあった。N響も割りに好評だったが，特に賞讃の声が高かったのは桐朋だった。ただし，これはあくまでも弦だけの話だ。

いずれにしろ，日本の曲はいつでも好感をもって迎えられていたようだな。

高倉　ロスでも，僕はN響と桐朋を聴いたが評判はきわめてよかった

≫5年目の新響と雰囲気

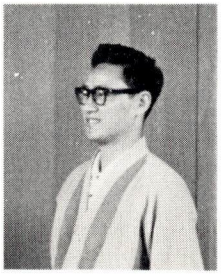
司会　ところで，ご両人とも数年ぶりの帰国だし，新響とは多少断絶があったわけだが，ひさしぶりの新響について感じたことを，話してもらえないだろうか。

高倉　僕は，昨年の4月，ブラームスの4番を聴いたんだが，技術的な向上という点から見れば，以前いたときとは雲泥の差だな。

家合　確かにうまくなったね。しかし，また再入団して吹いてみると向上の度合というのは想像していたほどではないような気もしている。10年前と同じトレーニングを，相変らず繰り返している感がしてならないんだな。確かに各個人のテクニックは向上しているけど，それがアンサンブルに結びついていないようだね。もっと隣りの人，他のパートの音を聞くべきじゃないかな。ダイナミックスの変化だって相当自由になったが，音圧そのものといった物理的な量の変化だけであって，心理的な迫力に欠けているような気がしてならない。

司会　新響のいまの雰囲気といったものを，どう感じとったかね。

▽家合氏△



家合　全体的に冷い感じがするようだね。あるプライドを持ったプロの集まりといったパートさえみられるようだ。技術的にはプロなみで一向さしつかえないけど，態度までそうなったんじゃ新響の価値がなくなると思う。もっとも，われわれ，ジェネレーションが違うし，繰り言ととられるかも知れないが……。

高倉　いま直接，新響に関係してないけど，確かに，そうしたミゾがあるようだね。せめて，以前に関係していた人に，近況を知らせるくらいは，した方がいいのじゃないかと思う。良い意味での家族主義といった形だね。

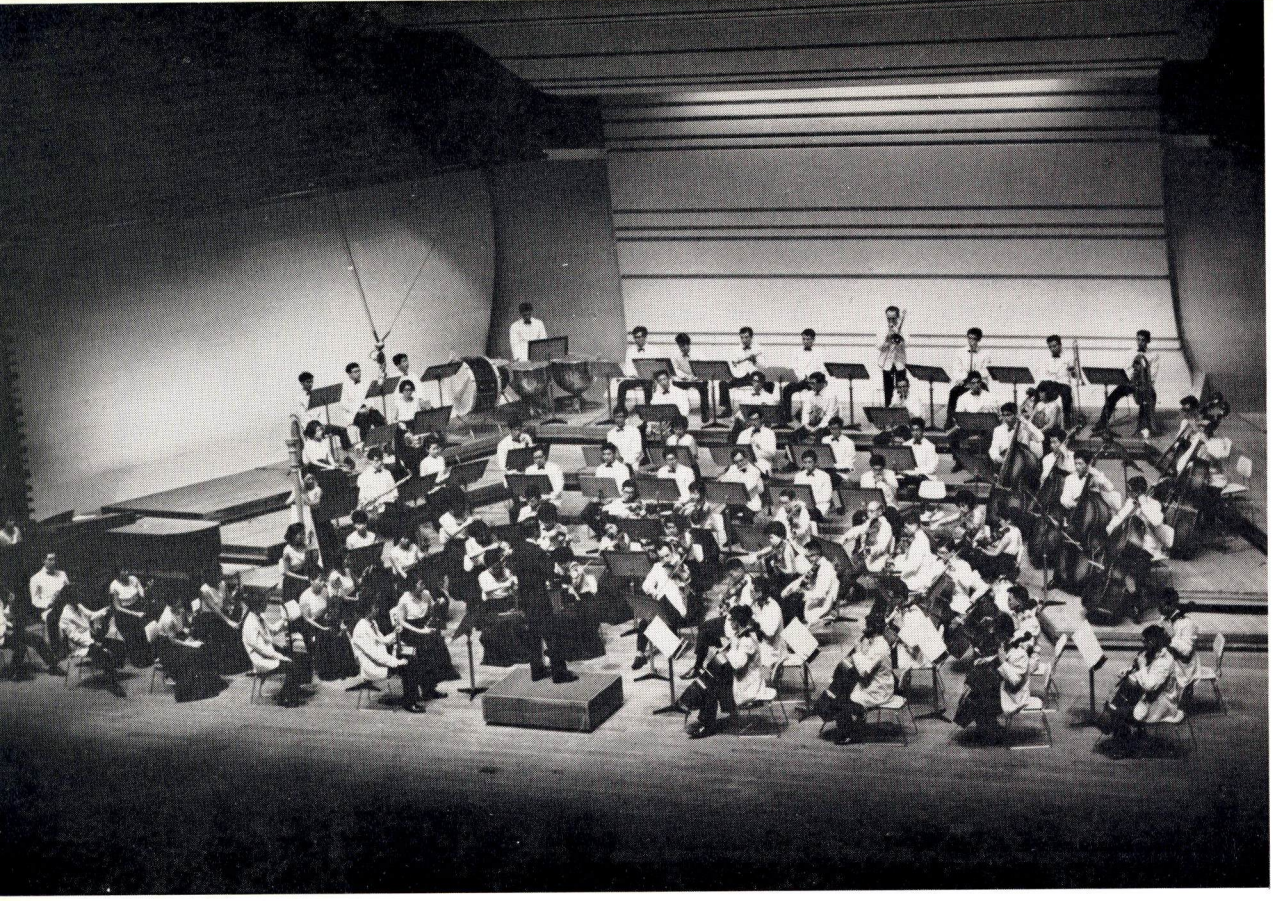
家合　学生オケ出身の人が多くなっているせいかも知れないが，大学の延長みたいに考えているキライがあるんじゃないだろうか。いわゆる閥というか，そういったギャップがメンバーの間に横たわっているふしもあるようだ。あくまで，社会人のつながりと責任といった線で動いていってほしいよ。

司会　何かいい案はないものだろうか。

家合　ウーン，そう云われても困るが，やはりいろんなチャンスを利用して交流すること，それに，変なプライドは早く捨てること，そういたっところじゃないかな。

司会　僕も，ことしから編集担当委員ということで，老兵カムバックの体だが，そのへんの事情をよく考えて意見の交流を図りたいと思う。

それでは，長いあいだどうも。



次回演奏会予告

新交響楽団
東京交響楽団 合同演奏会

◇ 200人の大編成オーケストラによるグランドフェスティバル

と　き	1968年8月8日（月）　午後7時	
ところ	東京文化会館大ホール	
指　揮	芥川也寸志，秋山和慶	
演　奏	新交響楽団，東京交響楽団	
曲　目	J.S.バッハ	「トッカータとフーガ」ニ短調（ストコフスキー編曲）
	レスピーギ	交響詩「ローマの松」
	バーバー	「弦楽のためのアダージオ」
	チャイコフスキー	幻想序曲「ロメオとジュリエット」
	チャイコフスキー	大序曲「1812年」

団員を募集しています

問合せ先　千代田区麹町2−3麹町ガーデンビル内
新交響楽協会　TEL（262）4038

パートから（その7）

「幻　　想」…… トランペット陣決断の曲である

“Trumpet, Trompete,
Trompette, Tromba！”

トランペットは，オーケストラの中において，金管楽器群の最高音域を受け持っている。

＜頭で吹く＞

構造的にみると，約1*m*40*cm*の真鍮管をご承知のような形に曲げたものに三つの付属管が付いており，三個のピストンが取付けられている。このピストンを押さえることによって付属管の長さだけ管長が変わり，さらに口から送り込む空気の圧力と口唇の締め方によって，約30個の音程が出せるようになっている。したがって，動くところはたった3個のバルブだけで，あとは，①口唇の締め具合い②口の内容積の広さ③空気の圧力の加え方④さらに頭，とによって，音階をつくるのである。しかし，全音域を通じて正確な音程を作ることは非常にむずかしく，この点はトランペット奏者の一番苦しむところである。

「頭で吹くということは，高音を出す場合には，〃高い音を出す〃という〃意識〃を持たなければならない」ということと，つねに〃美しい音色を作ろう〃とする〃意識〃を持つことである。

金管楽器のなかでも，とくに取りつき易いと思われるこの楽器が，アマチュアだけでなく，プロのオーケストラでも意外に素晴らしく演奏されない原因の一つは，このへんに問題があるのではなかろうか。

＜欠かせぬ毎日のトレーニング＞

トランペットは2枚の口唇が振動して，リードの役を果たすことによって音を出す。したがって，口唇はとくに大切にしなければならない。たえず口唇を訓練して強靱な筋肉を作り，フォルテシモでもピアニシモでも余裕を持って演奏できるようにきたえておかなければならないのである。毎日，少しでも練習しないとせっかく作り上げた筋肉が弱くなってしまい，高音が出なくなったり，音色のツヤがなくなったりしてしまう。それは，自分でも吹くのがイヤになるほど，惨めな状態に落ちてしまうくらいで，もとの状態を取戻すのはなかなか容易なことではない。「なんで，こんなうるさい楽器を選んだのだろう」と，自分が怨めしくなることもある。

練習も，ただ口唇を強くするだけでは駄目で，そのパッセージの要求する強弱と，音色に合わせて振動させなければならない。実に微妙な動きが要求されるのである。

＜トランペット奏者と決断力＞

オーケストラの曲の中では，トランペットは，いうなれば音量増量剤として使われることが多い。とくに他の楽器が盛り上げてきたクライマックス直前，いきなりフォルテシモで或るパッセージを吹くことが多い。よい例は，ワグナーの作品に出てくるような，カン高い，荒れ狂った響きを要求されるようなところである。そのときまで休みの小節数を念入りに数え，その数を信用して，少し前でブレスをとる。下腹に力を加えて，〃高さ〃を意識し，指揮棒が下がると同時に，空気の流れをせき止めていた舌を引いて，一気に口唇の隙間から空気を押し出す。そして音が出る。ここにいたるまでの時間は，わずか数秒であるが，この間にあらゆる条件，要素を考え，煩悶し，決断を下ださなければならないのである。

指揮者から，より大きな音量を要求されることがある。そうすると，さらに横隔膜をせり上げて，少し前に屈んで肺の中の空気を余さず押し出す。当然，顔面を真赤にして吹かなければならない。これ以上になると，肺の中の空気はすっかり出払ってしまい，肺が引っくり返って出てしまいそうに感じる。当然，顔は赤色から白色と変わり，最後に真青になる。その結果，貧血症状になって目の前が真暗になり，一瞬，意識がかすれてしまうことさえある。今夜のプログラムのうち「幻想」の一番最後，ベルリオーズ特有の管楽器の和音による輝やかしいフィナーレでは，以上のような涙ぐましい努力をしているとご承知ありたい。

また逆に，弱くて美しい音色で，ひかえ目に，しかもまろやかで，流暢にハモらなければならないことも多い。「大学祝典序曲」のなかで，最初に出てくる学生歌はその好例で奏者としては，とくにイントネーションに気を使わなければならないところである。

トランペットは，特にホルンなどに比較してミストーンを出しやすいということはない。だが，ひとたびミスをすれば，かならずバレてしまうことは確かである。ミスをした時の，穴にもはいりたい心持……。そんなとき思う。こんな楽器に，なぜ憑かれたのか。

でも，コントラバスからピッコロまでの全管弦楽の音の流れで，一番高いところに乗っかって演奏したり金管セクションの主役となって，神々しいばかりの和音の魅力に浸ることの楽しさは，値千金以上のものがある。これだけはラッパ吹きでないと，わからない醍醐味なのである。

（守谷一彦　記）

ステレオ30ＬＰ

10枚１セット

2,200円づつ

5回均等分割払

ホルプ
ミュージック
ゴールデンアルバム

HOLP MUSIC PROMOTION

指揮、演奏、録音とも世界一流

品質は市販レコードと同一品種

豪華ケース入り市価の半額

クラシック名曲アルバムⅠ

クラシック名曲アルバムⅡ

ポピュラー名曲アルバム

ふるさとの民謡大全集

「レコード」がインテリア階層の独占物であった時代は過ぎ去って国民の各階層にわたって購売層が拡大しわが家に備えておくという傾向がとくにめだってきています。このため家庭がどのようなレコードを持つべきか、その指針を与える組織が必要です。

このお仕事をやって下さるプロモーターを募集しております。

（お申し込み お問合せは下記へ）

株式会社　図書月販

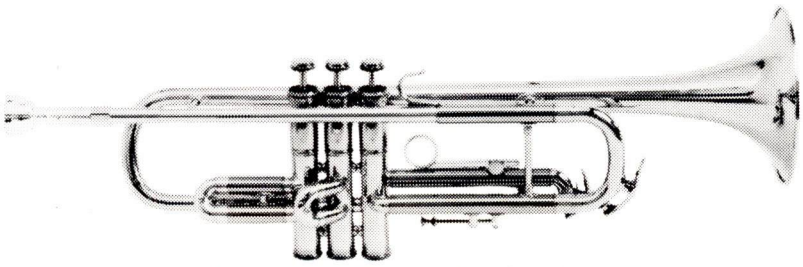
ホルプ・ミュージック・プロモーション

東京都文京区本郷１－４－８

兵庫ビル２Ｆ　ＴＥＬ（813）8372

はなやかに世界の名器とならぶヤマハの管楽器

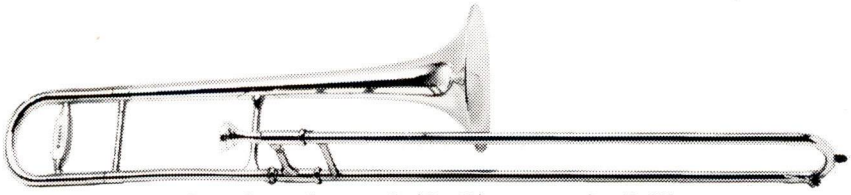
さえた美しさ　ふくみのあるボリューム　ヤマハの創意が音色にあふれます
理想的な材質で　音とかたちのメカニズムを完成した　日本のハイクラス
管楽器群　インペリアルシリーズとともに世界の賞賛をあつめています――



ヤマハトランペット＝YTR(B2M・B2ML)……各￥65,000



ヤマハフルート＝NO.30 FL-1……￥18,000



ヤマハトロンボーン＝YSL(Ⅱ・Ⅲ)……各￥65,000



ヤマハテナーサキソフォン＝YTS-Ⅰ…￥98,000



ヤマハアルトサキソフォン＝YAS-Ⅰ…￥87,000

YAMAHA 日本楽器銀座店



液体の宝石

こう云えるのはサントリーだけ。
サントリーだけの誇りです。樽のなかで、ひたすら眠るサントリーの原酒（モルト）。十年、二十年、三十年。



――長い日々の眠りのはてに、
ようやく湧きでる豊かなコクこそ
偉大な「時の技」がなしとげた、
すばらしい液体の宝石なのです。

世界のウイスキー

サントリー

オールド……1、750円
角瓶……1、350円